

アナログオーディオ&ゆとりライフマガジン

平成31年4月20日発行(年4回刊)第15巻第3号通巻63号 ISSN1349-595X

季刊・アナログ

# analog

2019  
SPRING  
vol. 63

Phile  
web

終わりになき「こだわり」を追求

発表!

analog  
Grand Prix  
2019

アナロググランプリ

2019 一生つき合える銘品達

進化する  
「昇圧」の世界

ピットインインタビュー

野力奏一さん〈前編〉



「サイレントマウント」の最終バージョンとなるXシリーズ。スパイク付きラック、コンポーネント用の「SM-5シリーズ」、スピーカー用の「SM-7」シリーズともに全ラインアップがXシリーズへと昇華した

## アンダンテラルゴ「サイレントマウント」の軌跡 超強力な最終形“X”が誕生

アンダンテラルゴのスパイクベース「サイレントマウント」は2008年の誕生以来、ラインアップや形状を進化させながらロングセラーを記録してきた。そして2019年、その10年間の集大成となるXシリーズを誕生させた。そこで本項では、「サイレントマウント」誕生からの軌跡をたどりながら、最終バージョンとなる“Xシリーズ”の魅力に迫っていく。

Text by  
**林 正儀**  
Masanori Hayashi

**溝の形状や配置が大刷新  
4モデルがラインアップ**

今回のニュース「サイレントマウント」の熱烈ユーザーである僕にとつて、感激高まるものだ。もう4年ほど前だがSM-7Aを愛用のスピーカーに敷くと、何をやってもダメだった床鳴りがピタリと静まった。その音と音楽の表出力は我ながら別次元で、もう手放せない。

そんな同シリーズに最終形と呼べる「X」が登場。ラインアップは4製品で、最新バージョンに至る経緯やその内容など、開発者であり同社の代表、鈴木良さんに伺おう。開発開始から12年だが、改良に改良を重ね、もうこれ以上はない。やりつくした感があるという。

いま目の前にスピーカー用の「SM-7X」、「SM-7FX」と小さい「SM-5X」、「SM-15XT」のあわせて4セットの新製品がある。Tがつくのはラック用で上位のチタンバージョンで、そのほかはステンレス系である。大型JBL等用広角スパイクのスピーカー向けの「SM-7FX」は、先行して昨年夏に登場している。他の3つはこのFXに準じたテクノロジー

にさらにプラスアルファして完成させたものという。

「サイレントマウント」は、徹底した薄型化（スパイク位置が低いほど音がよい）や二重リングによる共振の打ち消し（サイレントテクノロジー）、あるいは精密なキャンセルリングなど独自のテクノロジーを代々継承している。「Xシリーズ」一番の特徴は、チューニングのツボとなる同心円状の溝だろう。最初期から中期にはなかった溝加工だが、耳で確かめながら表と裏面にも、さらに最高峰のチタンバージョンやSM-7Xになるとサイドにまで溝を切り込んでいるのだ。ここでSM-7を例に進化の歴史を繕こう。初号機のSM-7が7Aとなり、7A2に引き継がれるのだが、ここではじめて溝付きになる。そして今回の7Xへと辿りつくわけだ。7と7Aは見た目は同じだが、キャンセルリングが見直したのが7Aだった。

実物を並べてみれば、一目瞭然だ。初期のSM-5Aはのっぺりして溝がなく、表面仕上げもおおらかなもの。それが最先端の「SM-5X」になるとどうだろうか？見るからに精密そのもので仕上げも美しい。くつき

「サイレントマウント」Xシリーズのラインアップ

スパイク付きラック、コンポーネント用 (50mm径)

スピーカー専用 (70mm径)



**SM-5TX**

¥70,000 (4個・税別)  
チタン製ポリッシュ仕上げ

※SM-5Xとは素材だけでなく、裏表面の溝等の形状が異なり、サイドにも溝を施した専用設計



**SM-5X**

¥33,000 (4個・税別)  
通常モデル (ブラックのみ)



**SM-7X**

¥42,000 (4個・税別)  
鋭角スパイク用 (ブラックのみ)



**SM-7FX**

¥48,000 (4個・税別)  
広角スパイク用 (ブラックのみ)



オモテ面で、写真右が「SM-5TX」で、左が前モデルの「SM-5T」。溝が追加されているのがわかる



ウラ面で、写真右が「SM-5TX」で、左が前モデルの「SM-5T」。溝がさらに増え、キャンセルリングも異なっている



歴代のSM-7シリーズ。右から「SM-7」「SM-7A」「SM-7X」溝との形状で異華しているのがわかる

3倍から5倍増の効果を確信  
Xの称号に相応しい完璧な出来

まずオーディオラックでSM

ここまで大差がつくとは  
音楽の表情を一変させる

「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

恐ろしく手間とコストのかかる加工だが、理屈から生まれたカタチではない。「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

ふと見ると、「5X」のサイドには穴がある。「この穴は表面処理の関係で、両側から挟んで固定しておくためです。処理は2回。文字も以前はシルク印刷でしたがレーザーに変えました」。

りと溝が切られ、外側はハの字のように上下が開いている。さらに裏面の違いは歴然とする。「SM-5X」の方は4本以上あるのではないか。

まずオーディオラックでSM

「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

恐ろしく手間とコストのかかる加工だが、理屈から生まれたカタチではない。「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

ふと見ると、「5X」のサイドには穴がある。「この穴は表面処理の関係で、両側から挟んで固定しておくためです。処理は2回。文字も以前はシルク印刷でしたがレーザーに変えました」。

りと溝が切られ、外側はハの字のように上下が開いている。さらに裏面の違いは歴然とする。「SM-5X」の方は4本以上あるのではないか。

15Tのチタン仕様同士の新旧を比べよう。神の声を持つエヴァ・キャシディ。そしてオルガンを含む室内楽、クラブトンのライブと聴き進めてみたが、たまげたというか、度肝をぬかれたというか。ここまで大差がついてしまうと、何が起きたんだという感じである。ズバリ言うと、レンジがぐんと拡大され、静かになってしなやかだし、オルガンの重低音がさらに1オクターブ下がったのは圧巻だ。エヴァは透明感200%の生声に近い。ハイトーンの裏声にも厚みがあり、表情がとても多彩だし、魂のこもったヴォーカルが人の心を打つ。それが今まで好評だった旧モデルだと、声がひっこんで平面的。ハスキーがうわずってかさつく感じである。

まずオーディオラックでSM

「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

恐ろしく手間とコストのかかる加工だが、理屈から生まれたカタチではない。「工場のマシーンもすばらしく進化していますね。色々やってみてこういう形に追い込んでいます」と鈴木さんは自信を込めていう。これぞ匠のワザである。

ふと見ると、「5X」のサイドには穴がある。「この穴は表面処理の関係で、両側から挟んで固定しておくためです。処理は2回。文字も以前はシルク印刷でしたがレーザーに変えました」。

りと溝が切られ、外側はハの字のように上下が開いている。さらに裏面の違いは歴然とする。「SM-5X」の方は4本以上あるのではないか。

で届くような高音、余韻は深い。みずみずしい弦の重なりも楽しめるマウントだ。クラブトンはイントロを聴いて欲しい。レンジや情報量の違いというか、演奏前の拍手や歓声、熱気、空気が自然で生々しいのが新だとすれば、旧は拍手バチバチで深みがない。雰囲気描写が乏しい分、単調に感じてしまうのだ。